



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国のネット小説の物語論的構造及びそれを生み出したネットコミュニティのあり方：穿越小説を例に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	邱，慧鳴
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第11860号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58585
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Huiming_Qiu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：邱 慧鳴

学位論文題名

中国のネット小説の物語論的構造及び
それを生み出したネットコミュニティのあり方
——穿越小説を例に

穿越小説とは今日の中国のネット小説を代表する小説ジャンルで、主人公の女性が古代へタイムスリップし、さまざまな冒険を経て恋を成就させるという基本的なパターンを持っている。本博論は先行研究を概観した後に、まずこの穿越小説の資料体を、プロップ＝グレマスの物語理論を用いて分析し、その物語類型としての構造を魔法昔話のそれとの差異において確定する。次にこの構造をキャンベルの原質神話および「精神分裂病患者の夢」と彼が言うところの物語構造と比較することで、穿越小説の物語構造が持つ意味を解釈する。最後にそのように解釈された物語構造を、これをネット小説として生み出したネットコミュニティ全般に関する考察の中に位置づける。

第1章では、穿越小説に関する先行研究が詳細に概観される。先行研究は、作家および作品からのアプローチ、媒体からのアプローチ、ネット小説のジャンル形成をめぐる歴史的アプローチ、ネット小説の特質研究の4つに大別することができるが、そのいずれもがネット小説の類型性の問題に正面から向き合っていない。もし90年代後半のネット小説には、手法にしても題材にしてもまだ紙媒体の小説の面影が残っていると言うなら、穿越小説をはじめとする玄幻小説、盗墓小説の第3期の新しいネット小説は、独自な特徴を示すようになった。書き手の創作動機は現実の描写や批判、経済的利益よりも、気の合う人とのコミュニケーションにある。コミュニケーションを取るために、書き手は創作過程において創作理念を回避している。サイトの中で、読み手は気に入った文章の書き手を誘って（あるいは書き手は読み手を誘って）コミュニティを作り、チャットしながら次の展開を決めていく。読み手があまり参加しない文章づくりは、途中で書き手に放棄されることが多い。つまり、文章の質と関係なく、コミュニケーションがうまく取れない文章は淘汰される。穿越小説はそうしたコミュニケーションの中で生まれた最初の小説ジャンルのひとつであり、その言語から見ても筋から見てもパターン化が顕著である。かつそうしたパターン化は、ウェブサイトを設定された細かいカテゴリーと、検索エンジンを通して強化される。検索エンジンの使用は、書き手にとっては読み手の選別過程であり、読み手にとっては小説の選別過程である。こうした選別を通してネットコミュニティは閉鎖的となり、それが承認する物語のパターンは強化されると推測される。

ネット小説は新たな媒体（ネット）で、新たな共同体（ネットコミュニティ）の間に新たな

方法（コミュニケーション型創作）によって大量に作り出されているにも関わらず、その類型化された物語が具体的にどのような構造を持ち、ネットコミュニティにとってどんな意味を持っているのかについては、先行研究においてまだ共通の理解が形成されていない。ここから本博士論文の目的は、物語論を用いて類型化が顕著な穿越小说の構造を明らかにし、更に、それを生み出したネットコミュニティのあり方を踏まえて、穿越小说の持つ時代的な意味を読み解くことに置かれる。

物語には内容が変わっても変わらない類型があることは、周知のようにプロップの魔法昔話研究によって「機能」の概念と共に明らかにされた。後になると、グレマスはそうした類型を物語構造と呼び、「機能対」や「行為項」等の構造分析の精緻化を試みた。本論では、プロップ＝グレマスの構造分析を用いて、代表的なネット小説サイトのクリック数上位の 60 編の穿越小说を資料体とし、その網羅的な分析によって穿越小说の構造を、分離、事故、再生、適応、模倣、一度目の難題、難題の解決、補助者の獲得、一度目の被害、探り出し、二度目の被害、援助、恋の達成、二度目の難問、難題への挑戦、勝利、日常への思い、最終の戦闘、日常への復帰という 14 の機能へ還元した。更に、その構造をプロップ＝グレマスが明らかにした魔法昔話の構造と比較することで、穿越小说の構造的な特徴が、「契約」の不在、「客体」の変容、帰還のダミー、そして全体としては主人公の個人空間の膨張にあることが判明した。

そうした構造が持つ意味を解釈するためには、精神分析を用いて物語構造の意味を解釈するキャンベルの神話研究が有効であると思われる。キャンベルは原質神話と「精神分裂病患者の夢」という二つの物語構造を比較することで、それぞれの物語構造に、主体の成長と共同体との関係という観点から意味を与えた。本論はキャンベルの解釈の図式と対照しながら、穿越小说の中でもっとも人気のある 3 つのサブジャンルからそれぞれ 1 編の小説、マイナーの冒険小説系から 1 編の小説を選び、具体的にその構造を見ながら分析を行った。その結果、穿越小说の物語構造の前半は「精神分裂病患者の夢」に、後半は原質神話と類似しているという構造の両面性が明らかになった。構造前半は主体がナルシズムに退行しそこから自己肥大を開始する過程であり、後半はそのナルシズムが、帰還のダミーや女性原理を操作しつつ、共同体の原理として共有可能となる過程である。

そうした両面性を持つ構造は穿越小说を創り出したネットコミュニティと関係している。ネットを媒体とする共同体はこれまでの血縁共同体、地縁共同体とどのように異なっているかについては野田正彰の論が示唆的である。彼は日本の 80 年代に「情報縁」を中心に結成された共同体を発見し、そうした情報縁の共同体は移動性の高い、中型のグループであり、個々の成員は自分の「個室」に引きこもり、大きな同世代意識を持たないことを指摘した。ネットを媒体とする共同体も情報縁の共同体のひとつであり、日本ではオタクのコミュニティとして、東浩紀や宇野常寛によって論じられている。そうした論における日本のオタクのコミュニティと比べるならば、穿越小说のコミュニティはメンバーの移動性が高く、コミュニティが相互に孤立しているという点では一致しているが、一方でコミュニティ内部ではある程度の「他者の欲望を欲望する社交性」（東）が見られ始めている。穿越小说の物語構造はそうしたコミュニティを安定させるためのものであると言える。この構造を通して、個人のナルシズムはネットコミュニティにおいて構造化され、共有されるのである。